

昭和三十四年四月二四日 ご講演

「民族の消長と頭脳価値について」

国策パルプ 文化放送 フジテレビジョン 産経新聞各社長 水野成夫先生

私は学校はまともに出たのでありますが、学校を出てからあつちこつち流浪の旅を重ねまして、今年六十一という、あなたがたのお父様やお母様より遙かに年が上ではないかと思うのであります。西暦で云いますと一八九九年の

生れですから、十九世紀ですか、兎に角二十世紀にならぬうちに此の世に生を享けて、田舎の金持ちの三男坊に生まれました。村の小学校を出ましてそれから中学は静岡県の静岡中学、それから大正七年に試験を受けて一高に入りました。一高から東大へ行きまして、大正十三年に東大を出たのであります。その辺までは誠に平穩無事だったのであります。色々人生をさまよひまして、悪運強くと云つた方が適当かも知れませんが、生き延びまして今の立場にさまよひ着いた、漂流して漂着したというのが本当ではないかと思つてあります。

この塾の理事長の前川さんとはもう二十年も前からお知り合ひで、かねがね敬意を表して居つたのであります。こういう立派な塾を建てられて、各地から集まられる諸君に色々な便

宜を与えて居られるという事は非常に嬉しい。実は新聞にこの塾の話が出ました時に早速伺おうと思つたのであります。その後色々の都合で今日迄遅れました。漸く今日皆様にお目にかかれまして私としても嬉しいのであります。

私は十数年前から自分は社会運動もやつたし、翻訳生活といひますか、文士の生活も十年程やつたし、会社員の生活も十年程やつたから、後十年何をしようかと云う時に、私がよく云つたり書いたりした事は、私塾でも造りたい、自分と一緒に生活して、若い人達と語り合う塾を造りたいという事を新聞や雑誌等で申したのであります。私がかねがね憧れて居つた仕事を前川さんがおやりになつたという事は、私から云うと実に羨ましい限りであります。私の家にも今三、四人程若い書生さんが居つて夜学へ行つたり、昼の学校へ行つたりして居るのであります。此の諸君と出勤や退社の時間が喰ひ違ふもんですから話す機会が余りないのですが、でも出来るだけ私としてはこの諸君と話したり、食事をしたりする事を私は楽しみにして

居るのであります。諸君は、そんなに偉い人にならなくてもよいから立派な庶民になつてくれと云う事をよく申して、時々一緒に人生を語るのであります。

今日は、別に皆さんに訓辞めいた事を申し上げるつもりはありませんし、また私が人生についてあなたがたに何か教える様な資格も御座いません。先程申し上げました様に六十一迄長い間人生を漂流して、そして漸く漂着して人生ももう三分の二以上過ぎて居るのであります。ただ今日は折角前川理事長があなたがたにお会いする機会を与えて下さいましたので、何か自分の感じている事を少しお話ししてみたいと思つてあります。

先ず「和」というのは大変大事な事である。また「敬」というのも大事である。私はあちこちの会社に関係して居りますが、その諸君に先ず「和」という事を申して居るのであります。「和」というものが会社であれ何であれ、組織の中心なのであります。和のない所に繁栄というものが無いのであります。それを一つ感じて

居ります。何か学者によりますと、和という字は「禾」(ノギヘン)に「口」と書くのであります。穀物を口の中に入れて噛みしめるという事なんだそうであります。つまり穀物或いは食物というものはおいしいと思ひ、そしてまたそれが胃腸へ下つて栄養になり体を養つてくれる、非常に大事な事であります。その素が和だといふのであります。ノギヘン(禾)を口に入れて噛みしめる、そうすると味もあるし、栄養にもなる。その口の中で噛みしめるといふ事が大事なのであつて、四百人か五百人の諸君が同じ寮で生活しているのであります。お互いがお互いの良い所を認め、また悪い所を見ない様にして、そうしてお互に人間としてその隣の人々を噛みしめるといふ所に和があるのでないかと考へるのであります。和という言葉は非常に大事な事です。

敬というのも非常に大事だと思ふのであります。六十年人生を生きて来て、色々の会社とか色々の家庭といふものの栄枯盛衰の姿を見て居りました、早い話が家庭等で云いますと、若い夫婦なり子供達が親を尊敬しないといふ様な家庭があります。若い子供達或いは若い夫婦は非常に立派な働き手で、仕事もし頭もいい、然し親を大事にしない。それは私は昔からそういう姿を見て、古い諺で「長幼序あり」といふような事を云うんで、やはり先輩とか年寄とい

うものを大事にしたらいいんじゃないかといふように思つて居ります。そうするとだんだんにどういふ結果が起きるか云いますと、その若い夫婦がまた子供を産みまして子供もだんだん成長して来る。そしてその子供も、だんだんに仲々出来るといふようになる。次に見て居りますと、その若い人達が十年十五年経ちますと子供に大事にされる。つまり親を敬わないよ

うな人は子供にも大事にされない。そうして家庭が何時もごたごたしているのであります。これは会社についても同じ事でありまして、兎に角重役になるような人は何千何万の人の中で何等かの能力のある人が大体に於てなる場合が多いのであります。或いは部長になり課長になる人にも夫々の長所がある、欠点があるかも知れんけれども、長所がある。それから下の連中がその上の部長なり課長なり重役といふものと不和を起しているといひますと、今度はまたその人達が重役になり或いは部長課長になつた時にしよつちゆう会社が揉めましてごたごたが起るといふ、昔からいふ因果関係といふ様なものが不思議に働いて、会社とか家庭とか色んな栄枯盛衰を見て居りますと、どんなに金持でもまたどんなに設備がよく儲かつている会社でも、そういう姿が敬といふ字、或いは和といふ字がない会社といふものは常に栄えない、家庭もだんだん衰退の一途を辿る、と

いふようになるのであります。私のこの物心ついでから四十年位の経験ですと、和といふ敬といふ非常に大事な事でありまして、前川理事長が恐らくお附けになつたと思ふんですが、和敬といふ非常に平凡にして永遠の真理を名にされている。ここで諸君が学業に親しんで居られるといふ事は、誠に結構な事だと思ふのであります。

今日私のお話ししようと思ふ事は何も和敬についてではないのであります。一寸気がついたのでから申し上げただけであります。先程申し上げましたように私は静岡県の田舎に生れたのであります。生れた月は一八九九年、明治三十二年十一月に生れました。村の小学校に通つていたのであります。或いは中学へ行つていた頃今から四十年五十年前の私の村の生活を考へていまして、私の村は遠州灘の海岸の寒村なのであります。先ず棉を作つて居りまして、棉の収穫の時になりますと、私の方では男衆とか女衆とか下男下女といふものが七、八人居つたのであります。母から祖母から女中さん方或いは男衆の人々皆して棉をとり、また蚕といふものを非常に飼つて居りまして、私達も桑の葉を摘んだり、蚕に桑を刻んでやつたり、或いは夜になりますと蚕が糞をする。それを新聞紙で取り換えたり、色々男衆や女衆や女中さん方や下男の諸君と或いは母や祖母と一緒に働いた

のであります。

そうしますと、それからどういふことをするかというところ、その棉を紡ぎまして糸をとる。或いは蚕もやはり糸にひきまして、そうして今度は機で木棉の着物或いは絹の着物を織るのであります。一生懸命で私なども機織の手伝等もさせられたのであります。そうして反物が出来る。それからまた何をするかと云うと、母や祖母が夜暗いランプの下で我々の子供の着物を縫ってくれました。我々は絹の着物等は、村一番の金持でしたけれども無論着せられない。つまり木棉の手織の紺を着るのであります。皆さんも御覧になったと思いますが、「二十四の瞳」という四国の小豆島の写真を御覧になりますと、小学校の子供達が紺の着物を着て、兵子帯といいますが三尺といいますが締めて、藁草履を履いて山野を駆け廻っている映画が撮られているのであります。あれそっくりの形で私達は働いたり、学校へ行ったり、或いは遊んだり、暴れたりしたのであります。今から考えると夢の様でありまして、我々が一枚の着物を着るにも非常に多くの労苦といいますが粒々辛苦という文字通り多くの労働というものがそれに加わっていたのであります。

また食物の方を云いますと私の方は暖い方ですから、砂糖等というものは非常に貴重なもので、盆か暮かに皆が贈答に使う様なもんだつ

たんですが、砂糖きびを畠に植えまして、この砂糖きびの木をロクロで挽くのです。挽くのは馬が挽く。馬が挽いて砂糖きびから汁を絞りますして、それを大きな釜で煮つめて黒砂糖を作るという非常な努力です。また大豆を作り、塩も海岸ですから色々終戦直後にあつた様な素朴な形で塩も作って、そして味噌も作るという様に衣と食というものに非常に苦労しました。

たまに農村へ帰ってみるとびっくりするのではありませんが、我々の三十年四十年前というのは一枚の着物を着るにもまた一碗の味噌汁を吸うにも、多くの労働といいますが、誠に惨めな労働を男女共にしたのであります。当時を思うと実に今の諸君というものはその点では恵まれているんじゃないか、という様にも考えるのであります。

今は一体それではどうなっているかといいますが、皆様も御承知と思いますが、毎年この数年間は新聞を御覧になつても、ラジオ・テレビをお聴きになつても、豊作だ、豊作だという様な事が云われる。終戦直後の食糧が非常に不足した頃に諸君が小学校を或いは中学校を或いはもつと若い少年だつたと思うのであります。私が、隔世の感があるのであります。私はもう凶作というものは余程の天変地異がない限り来ないんじゃないかと云う様にも思つて居ります。それはどういふ事かと云いますと、つま

り科学が発達し、不作というものが有り得ない様な状態に來ている。然も人間が非常に大きな努力をして汗水たらして努力するのでなくとも、科学の発達というものによつてそういう事が可能になつたと云える。

私は今、永福町に住んで居りますが、私の前は田圃でありまして小川が流れているのであります。この三年位前からぱったりと螢が出なくなつてしまつた。それ迄は夏になると螢が沢山居りまして、疲れて帰る我々に非常に大きな慰安を与えてくれたのであります。もう三年位前からだんだん減つて、去年あたりは一匹も居りません。といふのは、皆さん御承知の様に田圃へ撒く農薬のせい、つまり益虫も害虫も皆死んでしまふ。私達が小学校の時分はよく先生に引率されまして、螟虫(ずいむし)を取りに行つたのであります。隊伍を組んで、一年は行かなかつたのですが、二年三年あたりから六年、高等科あたり迄、皆隊伍を組んで半日位螟虫をとりに行く。競争して稲の葉についている害虫をむしりとるのであります。先生に頭を撫でられて大変お前は螟虫採りがうまいなんて云われるものですから、夢中になつて蛭に食われるのも忘れて競争をしながら採つたものであります。最早そういう事は日本に於てもあり得ない事だ。恐らく余程の天変地異がない限り毎年八千万石位のお米、昔は夢想だにもしな

かった様なお米が出来るのである。

これはつまり化学肥料の発達、つまり科学の発達がそうさせたのでありまして、また百姓も昔みたいに非常に努力をしないで、運搬の手段にしても脱穀の手段にしましても、殆んど機械或いは電力というものを利用して極めて楽に仕事をしているのでありまして、偶に生れ故郷に帰りますと今昔の感に堪えない。また着物に致しましても先程申上げました様に、貧しい土地へ棉の種を播いて棉の実のはぜるのを待つてそれを畑でとつて、それから棉の羽をとつりまして種をむいて、種をむいたものをまたつむいでそして足と手で苦勞して着物を織つた時代は昔の夢であります。今は棉の不作という事はあり得ないのであります。つまりこれも農業の発展によりまして棉の不作があり得ない。それにまた、アメリカ辺りでは、農民法のために棉の値段を一定の価額に保つて行くといふために、世界中が棉の増産をやりましてインドでもエジプトでも殊に中共の如きはあの宏い沃野へ膨大な棉の種を播きまして棉の收穫をやつてゐる。それが一つの大きな革命になりました。私の關係してゐる繊維の方でいいますと、繊維の価格の革命が既に起つたつある。つまり衣料がだんだん安くならざるを得ない、それにつれまして人絹とかスフとかそういうものが安くなつてゐる。

一番被害を受けたのが、何であるかといますと羊毛でありまして、オーストラリアで作つてゐるのであります。羊を飼つて羊の毛から取る。つまり動物の毛を取るものでありまして、やはり一番科学の発達に遅れをとつてゐる。このため純毛の洋服というものが今迄比較的高かつたのであります。然しその繊維の革命に押されまして、二、三年前からオーストラリアという国は羊毛で立つてゐる国なんだ、とても国が保つて行けない。兎に角羊毛を買つて貰はん事にはオーストラリアという国はつづれてしまふと云うので、オーストラリア人皆が智慧を絞つりましてどういふことが行なわれたかと云いますと、つまりボーリング、地面を掘る、ボーリングの技術を皆して研究して井戸を沢山掘る。それを非常に研究した。そして牧場のあちこちへこれを溜め或いは井戸を掘る。つまり灌漑用水というものを容易に牧場へ持つて行く、或いは牧場で井戸を掘り、小川の水を引いて行くといふような工夫をしたのであります。オーストラリアは乾燥地でありますから、充分な灌漑用の水がありませんと非常に牧草の増産が出来る。といふ事は、羊が沢山飼えるといふ事なのであります。牧草といふものはつまり羊の食糧なのであります。この二、三年の間に約三倍の増産が出来るようになった。それで羊毛の値段といふものも非常に安くなつて来た。

それと同時に羊毛と対抗して、羊毛が非常に値段が高いというので、日本なんかでも盛んに合成繊維というものが作られてゐる。ビニロンとかナイロンとか皆合成繊維といふものが作られてゐる。その値段も下つて来る。つまり量も沢山出来るし、値段も非常に安くなる。綿から始まりまして人絹とかスフ、羊毛それに合成繊維、ビニロンとかナイロンそういうものが皆安くなる。つまり人間の着る着物というものは昔にくらべると遙かに上等なものが何十分の一という値段で我々の手に入るといふ様になつた。これはやつぱり人類の非常な進歩或いは人類の幸福と云えるのではないかと思ふんであります。時に年に一回か二年に一回位生れ故郷の寒村へ歸つてみますと、私の家は近在で鳴らした金持だつたのであります。当時を思い出すと、一番貧しかった小作人の諸君の生活といふものと地主の生活といふものと非常に開きがあつたのであります。今歸つてみますと、どんなに貧しい家でも一番の金持の当時の四十年前の生活より遙かによい生活をしてゐる。その点は私も実にびっくりする位に全体の生活といふものは上つてゐる。つまりこれは科学の発達といふものがここ迄我々をしてくれたんだ、生活の向上をさしてくれただと思ふのであります。

同時にもう一つ申上げたい事は、生産が非常

に科学の発達によつてよくなり、またいいものが安く出来る様になる。同時にもう一つ人間が非常に暇になつて来たのであります。暇といひますのは諸君もこれから会社等に入つてみますと解りますが、人間というものが殆んどいなくとも製造が出来るという様な設備が、簡単な言葉でいいますとオートメーションがどんどん出来て来ているのであります、例えば紡績にしましても日清紡の島田工場等に行きますと、昼間の休みは五万シートとか六万シートとかいうスピンドルつまり「紡錘(つむ)」というのが動いているのであります。全然人がいない無人操業をやつて居ります。普通なら、昔でしたら女工さんが五百人も千人もいるような工場が昼の間は皆女工さんが食堂へ行つて御飯をたべている。殆んど無事故で無人操業をやつて居る。終戦直後辺りはそれを能率化するためにスケートを女工さんが習ひまして切られた糸を一々繋ぐのであります。今頃は自動に繋げますし、殆んど事故もないという、無人操業をしてもいいんであります。

私の関係しているパルプなんかに行きましてももう殆んどウオッチするだけです。見張るだけです。パルプというものが、木からチップという小さなかけらになりまして入つて行つて黙つてパルプ或いは紙になつて来る迄の間、全然人がいなくとも出来るのであります。ただそれを間違ひのないように見張りをする、ウオッチするというのはだけが必要になつて来る。例えば最近ではセメント工場なんか、昔は大変労力のいる仕事だったのであります。セメント工場なんかもう昔千人位居つた工場が、今はもう五十人位でただウオッチしているだけであつて事務の方に数十人の人が居つて売つたり買つたりするといふ形になつて居る。実に労力というものが要らなくなつて来ている。アメリカでは人力が非常に足りないののであります。人手が足りないといふのでオートマテイクな色々な機械を發明したのであります。日本みたいに人があり余つて居る国に持つて来ますとどうなるかといふと、半分遊びながら、仕事をして居るといふような形にもなるのであります。私の感じではこの五、六十年の間にやはり一週五日制といふアメリカと同じ様なシステムになるんじゃないか、アメリカは大きな工場はもう一週五日制、つまり金曜日と土曜日はウィーク・エンド、つまり休みなんです。八時間労働としまして一週四十時間労働制といふ様になつて来たのであります。日本でもだんだんにそういう形になりつつあるんであります。

こういうのが私の観測でありまして、そうしますと一体どういふ事になるか、昔から「小人は閑居して不善をなす」といわれるが、その暇といふものを一体どうするんだと、暇といふものをどういふ風に使うのが一番いいんだ、個人の為にも組織の為にも、社会の為にもいいかといふ事が大きな問題になります。難しい言葉でいいますと、余暇の善用といひますか、余つたレジャーをどうしてうまく使うかといふ問題が社会の大きな問題となつて来ました。アメリカ辺りでは週末のレクリエーションのためのドライブ、つまり遊覧時代といふものが始まつている。皆して都会から離れて自動車であちこちを遊び廻る。そしてレクリエーションをやる、都会から五十マイル、百マイル或いは二百マイルも離れて夫婦で或いは家族で弁当つんでレクリエーションに出かける。日本でももうそろそろ遊覧時代といふものが始まつて居る。お百姓なんかも昔は農閑期のほんの二日か三日を近くの温泉へでも行けるのが、一生に二度くらいだつたと思つて居たのが、此頃はバスに乗つて隊伍を組んでお酒を飲みながらそこら歩き。或いは温泉へ行つたり山へ行つたり、都会へ出て来る。私も関係して居ますが東京タワー等は大変でありまして、一日一万人も来たらといふ計算で我々は始めたのであります。どう致しまして、とても乗せ切れないといふ風に人が来る。そういう様に暇を作つて、或いは家に居つてラジオとか、テレビとか新聞とかをみて、そうしてスポーツを楽しんだり、文学を楽しん

だり、世界のニュース、国内のニュースを楽しむというようなそういう事にも暇が使われているのであります。

私は終戦後見て居って、そういう点で一番戦争直後新しい憲法の下で、革命的に救われたのは日本の女性ではないかと思えます。日本の女というものの家庭における生活、大部分の人達は家庭に居るのであります、農村に於きましても都会に於きましても、婦人というもの、女というものは実に惨めな、あなたがたが子供の時のお母さんやお姉さんの生活を想像して下さいればわかると思うのであります、それが非常に大きく解放されて、これはもう婦人の日本に於ける一つの革命なのであります。私の友人が此間も私の所にやって来まして、今後商売をする場合に一番の眼目となる事は何であるかといえますと、女に楽をさせる、これを常に考えなきゃならん。といえますのは女というものが男と同じ権利、そして女がやはり自分達の暇を作るという事に非常に大きな発言権と同様に興味を持っている。そう言われてみますと、最近都会は無論のこと、農村に於きましても電気洗濯機というようなものも非常に普及している。また一寸中流になりますと電気掃除機、或いは此頃は黙ってお米を入れて何か時間を合わせて置くと御飯が炊ける自動炊飯器というようなもの、兎に角皆女の人を楽にさせる。

更に最近ではアパートなんかに参りますと、ビニールの袋の中へもうおかずが出来たものが入って居りまして、それを買って行ってソースか醤油をかければすぐ御飯をたべられるというような状態。

去年の秋に私の末の娘が嫁に行つたのであります、此間はじめて夫婦で尋ねて来まして、一体君は昔から朝寝坊だったけれども此頃は何時に起きる？ といいますと、七時十五分に起きるといふ。それは偉いな。旦那さんは何時に起きる？ と云いますと七時に起きる。それで私はびつくりしました。私達の若い時の経験から云いますと主人が起きてから十五分もたつて女房が起きて来たら怒鳴りつけたのであります。私も不思議がつて一体それはどういう事なんだといえますと、娘が答えていいますには、一緒に起きたんでは退屈です仕事がないという。どういう事かといえますと、もうパンは切つてトースターへ投げ込んでコーヒー沸しをガスへかければそれでいいのであります、主人が起きて顔を洗つたり鬚を剃つたり兎に角会社へ行く準備をするのに十五分かかる。娘はそれから起きて丁度タイミングが合うという。私も、うたた年取つた事を感じたのであります。それで旦那様の方もちつとも不服でない、ちゃんとそれでいい事になっているらしい。それで女というものも楽になつたもんだと、此

間、家内と話したのであります。

そういうように人間というものが非常に多くの暇を持つて来る。暇が出来て来る。片方に於ては衣食住といえますか、一番足りないのは「住」でありまして、衣と食というものは非常に科学というものが発達して、いいものが安くふんだんに出来る。此頃は自主調整といまして、業界で自分で調整しないともう業界がやつて行けないという様なものが出来て、そして安くなつてしまふという位に科学というものが進歩して来る。これは先程申し上げたように三十年前の村の一番の金持よりか、今行つてみると一番貧しい家もつといい生活、もつといい着物を着、食物もちゃんとしたものをたべるといふ風に人類というものはデベロッパといえますか、生活水準が上つて来ている。特に日本に於ても終戦後の此の十年間非常に生活水準というものが上つて来ているのであります。

然しこの暇というものを一体どう使うかという事が一番大事な事でありまして。私は自分の若い時分の事を反省してみますと、色々先程申し上げました様にあつちへよろめいたり、こつちへよろめいたり、漂つたり、沈んだり浮んだりして此の六十一年というものを暮して来たのであります、今になって反省してやはり間違つた事でも何でも真面目になつてそれに取組

であります。その頃に於きましても、やはり一番出来たのは日本人、日本の学生というものは図抜けて出来たのであります。私は日本人の頭脳というものは此の民族の純潔性と関係があるか知りませんが、全体としては非常に優秀なのであります。此の間も世界を一廻りして帰つて来た結論というのは、兎に角日本の一般の庶民というものは世界で一番偉いと帰つて来てから云つたのであります。或る一部の人々、即ちアメリカを崇拜し、或いは西欧を崇拜し、或いは共産圏を崇拜している諸君は、こう申すと笑うのであります。絶対に私の見ている所は正しいと思つたのであります。明治時代の先輩達が此の頭脳の開拓という点で大きな功績を残してくれました。

明治の初め日本はまだ今の資本主義の勃興の頃でありまして非常に貧しい国だったのであります。明治の大先輩達はそれこそ借金を質に置く様な苦勞をして義務教育制度というものを敷いた。これはヨーロッパやアメリカの何処にも劣らぬものであります。私の時分は最初は、義務教育というものは四年だった。それが途中から六年になってきた。兎に角今は更に延長されたのであります。その義務教育制度というもののために、国が貧乏しても本当に借金を質に置いても義務教育制度というものを敷いて下すつた。それがつまり基となつて、産業

も興り国民の良識も発達した。そうして今迄ずっと来ていたのであります。

この頭脳の訓練というものと素質の良さとにも劣らぬのであります。ヨーロッパへ行つてもアメリカへ行つても、庶民のレベルからいいますと日本はもう世界一であると確信しているのであります。そしてまた若い人達の頭脳も絶対に他国に劣らぬものであります。そしてこれから諸君が学校に居られてもまた学校を出られて就職されても、諸君の課された問題というものは、先程も申し上げました様に、常に時間というものは余るのであります。その余暇を不善を為さず何か良い方向へ向ける。これがつまり日本を救う道なのであります。

早い話が「頭脳」というものがある。本当にこれこそが値打である。昔は我々若い時分はカール・マルクスの資本論を大分読んだのであります。あの中には労働価値というものが何であるかという事は色々な方式で説明されて居るのであります。労働価値論と一般に云われていますが、今でも共産党の諸君が労働価値論を振り廻していると思つますが、これは最早陳腐極まるものであつて、つまり頭脳価値論というものがこれに代る。先程も申し上げましたように、例えば羊毛の値段が半分になり、三分の一になる。それは人間の労働でそうなのではない

のでありまして、工夫によつて牧場へ水も楽に持つて行くというような事が牧草を三倍にする。牧草が三倍になれば三倍の羊が飼えるのであります。これを犬なり人間なりが見張つていけばよいのであります。またお米にしても昔は粒々辛苦して兎に角やつて居つた。今は農薬の発達、肥料の発達、そういう様なもので非常にお米というものが沢山とれる。それで不作というものが有り得ないというような形になってきた。これは汗水たらした労働のお蔭ではないのであります。頭脳がそういう大きな価値を生み出して来るのであります。

特に日本に於きましてはこの頭脳の価値を極端に活かす以外に此の国の国民或いは国が榮える道はないのであります。昔私は戦争中シンガポールへ行きました。ビンタンという島へ行つたのであります。ビンタンという島は全島ボーキサイトであります。真赤な土が、道路も何も真赤でありましてゴムの木さえ生えていない。だから昔はインドネシアの土人達はこれはもうとんでもない島だ、草も生えないと非常に嫌がつて居つたのであります。人間が科学を研究して来ますと、ボーキサイトというものは一つの金属で、それを精鍊するとアルミニウムになるといふ様な事があるし、しかもまた戦争というやうなこれは喜ぶべき事ではないんですが、どうしても飛行機というものは軽い

ものでなくちやいけないというような事になると、シンガポールに千何百という島があるのでありますが、ビントラン島というのは一尺位表土をはねますと全部ボーキサイトである。それで日本でもこれを持って来て利用したのであります。

或いはまた空気の中に窒素があるとは誰も考えていない。科学が発達すると空気の中から窒素を取って、色んな事が、つまり無から有を生ずるのが頭脳であります。つまり頭脳価値論が労働価値論に取って変わる様な時代が諸君の前に開けているのであります。

諸君は大いに体を鍛えられると同時に、常に自分の向き向きに従って真面目に取組んで、創意工夫或いは日本の諸君の生活をそうして国民の生活を上げるような智慧を、つまり頭脳を十二分に活用する様な智慧を出される事が必要ではないか。諸君が外国人と比べてどうかこうだとか卑下する必要はないのであります。大いに自信と誇りを持って、プライドとデイングニティとを持って、自分達のこれからの方向というものに向って常に真面目に取組む、体を鍛えられると同時に、しよっちゅう何かと取組まれるという事が大事である。

そうされますと、恐らく十年たち、十五年たつ間に、それが何等かの形で実を結んで、そうして諸君も幸福になるし、同時に諸君の周囲、

或いは諸君の後から続く後輩達に貢献するようになるのではないか。

私などは、最初に申上げましたように非常に無軌道無計画に六十一年を生きて来ましたが、その意味で悔恨なき能わず、非常に後悔しているのであります。もう少し自分がちゃんとした生活設計を持って真面目に勉強し一つの軌道を渡って来たら、もう少し世の中の為にもなつたんじゃないかというように日夜反省して居りますので、これから学校を終えられて、或いは学業を修められて社会へ出られる皆様方に若干の反省といえますか、先程前川さんの云われた老の繰り言を申上げ諸君の御精進御奮闘をお祈り致しまして私のお話を終りたいと思います。

※当DVD収録の講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。